

奨励賞

ひまわり

西軽海町 山 勝三

先の第二次世界大戦が終結して七十七年、その間、世界各国で数多くの紛争やテロはあったが、少なくとも世界の平和維持に責任ある超大国が、他の主権国家を侵略し、わがものにしよとするとする本格的な戦争はなかった。

それがある日、突如、ロシアの無謀なウクライナ侵攻が始まり、今、世界平和は第二次世界大戦以来の危機に瀕している。昨日まで平和だった国土を戦車が蹂躪し、ミサイルが飛び交い、爆弾が無差別に投下されている。

建物は破壊され、住民は逃げまどい、逃げ遅れた人は命を絶たれている。隣国との国境には戦火を逃れた難民が、幾百万と押し寄せ混乱の極み。これが二十一世紀において、この地球上における現実の出来事は……。天を仰ぐしかない。

コロナ禍への対応で、世界中の国々が生きるため必死にもがいている中、それをせせら笑うようなロシアのウクライナ侵攻の暴挙。戦争を仕掛けることによって、欧米側に傾くウクライナを暴力で恫喝し、自国の属国化しようとの身勝手な卑劣極まりない行動。言う事を聞かなければ、禁断の核の使用までちらつかすそのやり方は、もう、世界平和を破壊する何ものでもない。

これが国連の常任理事国として、世界から認められ、率先垂範して世界平和への貢献を期待されている、大国ロシアのやる事だろうか……。言うべき言葉がない。

この現実を受けて、ソフィア・ローレン主演のイタリア映画「ひまわり」を思い出し、急遽、ハードディスクに録画して置いた作品を取り出し、食い入るようにして観た。

映画撮影の舞台となったひまわり畑は、ロシアと国境を接するウクライナの東部、現在のヘルソン州にある。情報によると、この地はすでに早々とロシア軍の侵攻を受け、占拠されてしまっているという。

ひまわりは別名、日回りともいう。漢字名は「向日葵」。英語名は「サンフラワー」。

開花後、太陽を追って花の向きが動くことから、太陽のシンボルとして、洋の東西でその名が付けられた世界の万民が愛する太陽の花、平和の花だ。

映画の終り近く、画面には見渡す限り地平線の彼方まで続く、黄一色に埋め尽くされた、広大なひまわり畑が映る。風にざわめき揺れ動く幾十万本のひまわり。

映画の主人公は、第二次世界大戦で、イタリアから遠くロシア戦線へ狩り出され、終戦後いつまで待っても帰国しない夫を、待ち続ける妻。そんな妻は、夫が帰国兵の一人から、遠い異国の地で生きていた、との情報を得て幾多の困難の末、遠くウクライナの地でついに夫を探し当てる。

しかし、愛する夫は、極寒の異国で雪中行軍の最中、寒さと飢えで倒れ、凍死の寸前、奇跡的に現地に住む女性に助けられていた。その時のショックで、過去の記憶を一切喪失してしまつた夫は、助けてくれた彼女と結婚し、子供まで設けて、ささやかながらも幸せな家庭生活を、異国で送っていた。

画面いっぱい、悲しげに揺れるひまわりの花をバックに、戦争のもたらした過酷

な現実を知り途方に暮れる主人公。ヘンリー・マンシー二の悲しく切ない主題曲と相まって、涙なくして見ることはできない名シーン。

撮影に使われたあのひまわり畑は、第二次世界大戦時の、戦争犠牲者たちの集団埋葬地の跡だった。兵隊や捕虜、農民、老人、子供など、数えきれないほど無数の犠牲者たちの遺体が、かつて地中に埋まっていたという。

物語はたった一組の夫婦の間に戦争がもたらした悲劇を描いているが、同じ思いをした人々が、あの幾十万本のひまわりの数と同じだけ居たと思ふとたまらない。

それら一人一人の無念の想いと、あれから八十年近く経った二十一世紀の今日、飽くことなく、ウクライナの地で同じことが繰り返されている悲劇を想うと、胸が痛くなる。

ウクライナ国旗は青色と黄色の二色旗。

青色は平和のシンボルである青空、黄色は豊かに実った麦畑、を意味しているという。その澄んだ青空を戦火で赤く染め、黄色に実った一面の麦畑を真つ黒に焼き尽くし、尊い人命を理不尽に奪う無謀な戦争。

われわれ人類は未来永劫、同じ人間同士でこのような無残で理不尽な戦争を、繰り返すのであろうか。

ウクライナの問題は他人事ではない。この地球上に住む一人ひとりが、明日は我が身と考え、侵略者を糾弾し、声を大にして世界平和を訴え、その実現のため行動したい。

平和は他人まかせでは実現しない。先の第二次世界大戦を仕掛けた当事国の、国民の一人として、この国に住む全員が先頭に立つて行動してこそ、世界平和の扉は開かれる。